

須賀川市立義務教育学校「**稲田学園**」学園だより

とう oun
稲雲

令和6年度 第19号

令和7年2月14日発行

発行者：校長 田中 朗裕



○**稲田学園の伝統、新たなステージに向けて！**

本校が地元企業のJ-RAPさんと渡辺苗屋さんのご協力をいただきながら、令和3年度から続けてきた「ランドセル・ドライトマトプロジェクト」が、令和7年度を最後に終了となります。そこで、2月3日（月）に、このプロジェクトに関わってきた5年生から9年生が、J-RAPの会長様から「これまでの活動を振り返って」、「今後の稲田学園に期待すること」などについて、お話を聞き、ドローンを使った校庭での記念撮影を行いました。「ドライトマトプロジェクト」は、来年度で終了しますが、海外にランドセルを送るという活動は続け、新たな稲田学園の伝統を創っていきたいと思っています。J-RAPさん、渡辺苗屋さん、これまで稲田学園のために、本当にありがとうございました。



○**集まった「みんなの気持ち」を届けました**

2月4日（火）に、保健委員会の児童生徒が集めた「赤い羽根募金」7,852円を須賀川市の社会福祉協議会に届けました。また、2月7日（金）には、「ユネスコ世界寺子屋運動募金」として、児童生徒会役員が集めた、書き損じハガキ13枚と募金7,157円を須賀川地方ユネスコ協会に届けました。

どちらの活動も、児童生徒会や委員会のメンバーが、全校児童生徒に目的をしっかりと伝え、各教室を回って募金等のお願いと呼びかけを行い集めたものです。一人一人の「気持ち」が集まり、稲田学園の「みんなの気持ち」として届けられたことは、本当に嬉しいことです。



○**新入生保護者説明会を開催しました**

2月5日（水）に「令和7年度入学 新入生保護者説明会」を実施しました。校長から教育目標や稲田学園についての説明、現1学年担任から学校生活・入学に関する心構えと準備についてなど、各担当から説明をさせていただきました。新入学児童の入学が今から楽しみです。



○幼稚園児・保育園児の小学校体験を実施しました

2月12日（水）に、来年度稲田学園に入学する幼稚園児と保育園児が、本校に来て体験を行いました。はじめに授業の様子や校舎を見学し、その後、1年生が「できるようになったこと」として、国語の教科書の音読、けん玉やなわ跳び、歌や鍵盤ハーモニカの演奏等の発表をしたり、園児と一緒に交流活動をしたりしました。これまで1年生が練習してきた成果が表れ、とても楽しい時間になりました。園児のみなさんも、姿勢もよく、しっかりと話を聞くことができ、とても立派でした。最後は、1年生が廊下にアーチを作って園児をお見送りする様子も見られました。



○貴重な「学び」を積み重ねています!!

2月5日（水）に、5年生が市の研修バスを使って「須賀川市議会」を訪問しました。議場や市長室といった普段入ることのできない場所に入ったり、議会の説明を聞いたり貴重な経験をしてきました。また、5年生が考えた須賀川市の魅力を発信するアイデアも市議会に提案をしてきました。訪問までに、話し合いをしたり、調べ学習をしたりしながら、提案書を作ったりと、多くの時間と努力を積み上げた分、たくさんの質問が生まれ、それを質問しながら確かめる姿も見られました。「知りたいこと」、「伝えたいこと」のために学び、そこからまた「新たな疑問」が生まれ、「学び」が始まるという、素晴らしい「学び」の体験をしてきたようです。



○笑顔の「15の春」に向けて

現在、9年生の高校入試が本格化しています。すでに私立高校の受験は終了し、進学先が確定している生徒もいますが、これからが本番という生徒が大半です。2月13日（木）に県立高等学校・特別支援学校の出願先変更期間が終了し、通信制に出願する生徒を除いて、すべての生徒の出願先が確定しました。人生で初めて立ち向かう「高校入試」という大きな壁を目の前にしている生徒たちには「今できること」に全力で取り組み、自分の力で壁を乗り越えてほしいと思っています。そして「15の春」を笑顔で、そして納得して迎えることを職員一同で願っています。

随 想

「小さな心遣い」がつなぐもの

毎朝横断歩道に立って登校指導をしていて思うことがあります。横断歩道を渡る時、急ぎ足になったり、小走りになったりする子どもがいます。路面が凍結している時は、転んでしまわないかドキドキしながら見ているが、何だか嬉しくなります。横断歩道を渡り終えた時に、寒くてかじかんだ手をポケットから出して、止まってくれた車の運転手さんに、お辞儀をする子どもを見る時も、何だか嬉しくなります。休み時間や放課後に校舎内を歩いている時に、立ち止まってあいさつをしてくれる子どもを見る時も、何だか嬉しくなります。

子どもたちにとっては「小さな心遣い」なのだと思いますが、子どもたちが、自然に「感謝」や「思いやり」といった自分の「心」を表現することができることに気づき、温かい気持ちになるからです。きっと、人と人、社会をつないでいくのは、そんな「小さな心遣い」だと思うのです。相手に認められたり、褒められたりしなくても、相手を気遣い、思いやる「心」を届け、相手もその「心」を感じるから、また次の誰かにその「心」をつないで、温かく、幸せな気持ちにしてあげたいと思うのだと思います。私自身も、子どもたちからもらっている「小さな心遣い」を次の人につないでいきたいと思いながら生活しています。